

この言葉(1)

国家は人間の命に対して完全な責任を負わない。

「人間」であり続けること、それ以外にあなたをこの世界で守ってくれるものはありません。

これは旧ソ連ベラ・ルーシの2015年度ノーベル文学賞受賞作家スベトラナ・アレクシェービッチの言葉である。1948年生まれの彼女はドキュメンタリー作家として、自らの声を書き残す機会のない「小さき人々」の歴史を書き留めることを使命とし、聞き書きによる執筆を続けてきた。

第二次世界大戦を「英雄的に」闘いながら、終戦後は自分たちの過去を隠しながら生きざるを得なかった女性達の声綴った『戦争は女の顔をしていない』(1983)、目の前でドイツ兵に両親や家族を殺された子供たちの証言を集めた『ボタン穴から見た戦争』(1985)、アフガン戦争から戻った元兵士たちのその後を追った『アフガン帰還兵の証言』(1991)、ソ連崩壊後の生活の変化についていけず、絶望ののち自殺した人々の家族取材した『死に魅入られた人びと』(1994)、そして10年をかけたチェルノブイリの原発事故による被災者たちの聞き書きを完成させた『チェルノブイリの祈り』(1997)はすべて日本語にも翻訳されている。

2000年にNHKで彼女を主人公にしたドキュメンタリー番組「ロシア 小さき人々の記録」が放映され、2003年10月には来日、各地で講演会が開かれた。私も大阪での彼女の講演を聴いている。

今年2月19日にNHKのBS1スペシャルで「ノーベル文学賞作家 アレクシェービッチの旅路 チェルノブイリからフクシマへ」という2時間番組が放映された。2011年3月、福島で原発事故が起こったとき彼女が日本に送って来たメッセージには「私は過去について書いていたのに未来のことだった」という想いが託されていた。それ以来、フクシマの「小さき人々」の声にも耳をすまそう、「巨大な科学技術と自然の相克という黙示録に遭遇した」人たちがどのような考えと抱き、どのような問題に向き合っているか、彼女は自分の目と耳で確かめたいと思い続けてきた。そして、2016年11月にその夢が実現した。

殆どの住民が避難した小高区で家業の魚屋を再開し、今に至る杉本さん。高齢者を中心とする住民にとって生活物資を入手するには大変な困難が伴う。彼は語る。「祖父や父が暮らした故郷、私がこの土地を見捨てるわけにはいかない。」その言葉はアレクシェービッチに大きな印象を残した。「現代の世界は、旅人の宿です。みんなが世界のあちらこちらに行ったり来たりしている。日本では故郷という言葉がまだ以前の意味を持っている。」もちろんこのような現象は世界のいたるところで見られるものだ。チェルノブイリでも汚染度の高い故郷の地に戻ってくる人々はいる。世界各地の内戦地でも命の危険を顧みずに、自分が生まれ育った土地から離れない人々は多く存在する。杉本さんもその一人だ。

アレクシェービッチが訪ねた飯舘村の菅野榮子さん(81)も家族と離れて一人、仮設住宅で

暮らしている。野菜作りを生業としてきた彼女は土と太陽の恵みに感謝し、「自分が出来ることを見つけて生きないと、放射能の中を生きることはできない。私は飯館の土になる」と言い切った。「ただし、村や国や企業が安全と安心をどれだけ担保に入れるか、これからが戦争です」と語る彼女の生命力に、アレクシェービッチは心底感動している。

50頭の牛を飼っていた酪農家の長谷川健一さん(63)は、被災後も仕事を続けていたが、牛乳が出荷禁止になったあと、大量の牛乳を絞っては捨てる作業を繰り返し、やがては可愛がっていた牛も処分せざるを得なくなり、酪農を廃業した。彼は村と国の対応に対して自分は批判的だった、と当時を語る。研究者や国の関係者が持っている線量計と、村民に与えられた線量計とは違ったものだったというのだ。つまり、村民に与えられた線量計は実際よりも低い汚染数値を示す。食べてはいけない野菜やキノコなどについての情報が曖昧であった。チェルノブイリの場合をもっとひどかった、とアレクシェービッチは言う。国は住民が真実を知ることを恐れ、事故の情報を全く流さなかったのは、私たちの知るところでもある。真実が隠蔽されたため、事故のあと10年、20年経っての発病が絶えない。長谷川さんは飯館村の未来を見るために、2016年にチェルノブイリを訪れている。その結果、彼が出した結論は「子供や若い人たちが戻ることは無理だ、戻すべきではない」というものだった。現在、彼は仮設住宅と村を行き来し、自分たちの土地が荒れないよう、蕎麦を育てている。

長谷川さんから酪農の設備などをもらい受けて、今でも酪農を続けている佐藤ケサヨさん(69)は牛乳の出荷制限にはひっかかったが、避難区域にはならなかった隣の相馬市に住んでいる。事故後、汚染されていない北海道の干し草を購入して牛を育てているが、経済的に大変大きな負担がかかる。しかし、やめるわけにはいかないと彼女は語る。2011年6月10日に彼女の隣家で悲しい出来事が起こった。妻と子を避難させて酪農を続けていた菅野重清さんが自ら命を絶ったのだ。牛舎の壁には「原発さえなければ」という一文を含む遺書が残されていた。ケサヨさんは誰もいなくなったこの牛舎を今も見守っている。そのときの気持ちを訊かれたケサヨさんは答えることを拒否し、アレクシェービッチが「私が悪かった」と謝る場面がある。彼女の言葉。「社会主義であれ、資本主義であれ、国家は似たようなもの。国家と役人たちは国家と自らの救済に忙しい。人間を救うのではなく。」

もう一人、102歳で自ら命を絶った人がいる。大久保文雄さんは4月12日、飯館村に避難指示が出た翌日、息子の妻、美江子さん(63)に「わしも長生きしすぎたのかもしれない」という言葉を残して命を絶った。美江子さんは避難先から文雄さんの位牌を自宅に移した。生まれて育った102年間、故郷がすべてだった文雄さんに故郷の景色が見えるように、彼の魂がその土地に居続けるように、との思いからだ。彼女はその前に亡くなった夫と文雄さんの写真が並ぶ自宅に戻る決心をした。

アレクシェービッチの言葉。「事実を知ることが大切です。そこから抵抗が生まれてくるからです。チェルノブイリとフクシマで起こった大事故は世界でもほかに例を見ないほどの規模のもので、経験のない私たちには抵抗の仕方が分からない。被災者は社会と切り離され、他の多くの人々にとって、チェルノブイリとフクシマは医学上、経済上の数字にすぎな

いのです。」

福島を訪れたあと、彼女は東京外大の学生たちを前に次のように語った「チェルノブイリとフクシマの文化を創らなければならない。新しい知、新しい哲学を創らなければならない。」

「どうして私たちの『苦悩』は『自由』へと変換できないのでしょうか」——現代に暮らす私たちに向けられた彼女のこの問いは重い。彼女自身、簡単に答えは出ない、と言っている。そしてこの課題を追求するために、彼女はこれからも時代と人間を追い続ける、と自身の意志を表明する。

私たちも新しい知、新しい哲学を創る努力を重ねながら、抵抗する力を養っていかねばならない。

(2017年2月21日 扇千恵記)